第 56 回文化講座

発掘調査速報 2013 その 2

【日時】9 月 21 日（土）13：30 ～ 16：00

【会場】沖縄県立埋蔵文化財センター　研修室

第 56 回文化講座

発掘調査速報 2013 その 2

もくじ

沖縄県立埋蔵文化財センター
第 56 回文化講座「発掘調査速報 2013　その 2」

平成 25 年 9 月 21 日（土）　13 時 30 分～ 16 時 00 分

あいさつ　　沖縄県立埋蔵文化財センター所長　下地　英輝

海軍病院建設予定地内発掘調査　13：35 ～ 14：05（30 分）　具志堅　清大・・・・・・・・・1

県内遺跡分布調査　14：05 ～ 14：35（30 分）　瀬戸　哲也・・・・・・・・・・・5

◇◇◇◇◇◇　休憩　14：35 ～ 14：50（15 分）　◇◇◇◇◇◇

戦争遺跡詳細確認調査　14：50 ～ 15：20（30 分）　瀬戸　哲也・・・・・・・・・・9

白保竿根田原洞穴遺跡確認調査　15：20 ～ 15：50（30 分）　仲座　久宜・・・・・・・・・15

◇◇◇◇◇◇　質疑応答　15：50 ～ 16：00（10 分）　◇◇◇◇◇◇

海軍病院建設予定地内発掘調査

沖縄県立埋蔵文化財センター
具志堅　清大

調査目的：キャンプ桑江からキャンプ瑞慶覧への海軍病院移転計画に伴う記録保存調査
所 在 地：キャンプ瑞慶覧内
遺 跡 名：普天間後原第二遺跡、普天間古集落遺跡
時　　代：縄文時代、グスク時代、近世～近代
調査期間：平成 24(2012) 年 8 月 29 日～平成 25(2013) 年 3 月 28 日
調査面積：約 8000㎡

調査成果概要 (時代別)

○縄 文 時 代：遺構は見つかっていませんが、縄文時代晩期の土器 (宇佐浜式土器) や石斧が出土しています。

○グスク時代：普天間後原第二遺跡の範囲を中心に遺構はピット、土坑などが確認されています。ピットの平面的位置関係からは堀立柱建物跡と想定されるものがあり、二本の中柱をもつ大型のもの、６本柱、４本柱の比較的小型のものがあります。このほかに柵状にのびるピット列、深さが２ｍを超える土坑なども確認されています。
遺物はグスク土器やカムィヤキ、中国産白磁、滑石などが出土しています。

○近世～近代：戦前まであった普天間古集落の様相をうかがえる多種多様な遺構・遺物が多く確認されています。
遺構は、ピット・土坑を中心に、普天満宮へと続く道跡や井戸跡、溝跡、方形石組遺構、石積み、炉跡、避難壕等が確認されています。
遺物は、陶磁器類 (沖縄産・本土産・中国産)、瓦、金属製品、木製品が出土しています。

第１図　遺跡の位置（キャンプ瑞慶覧内）

写真１　調査区及び遺跡範囲

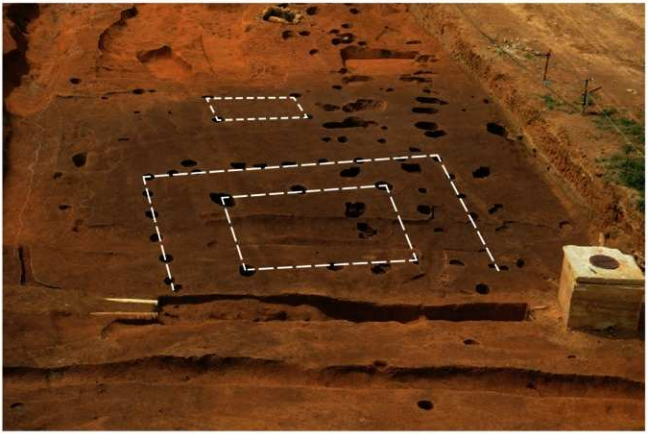


写真２　掘立柱建物跡（グスク時代）

写真３　掘立柱建物跡（グスク時代）

写真４
カムィヤキ出土状況（グスク時代）

写真５　道跡検出状況（近世～近代）

写真６　土坑内遺物出土状況（近世～近代）

写真７　土坑内遺物出土状況（近世～近代）

写真８　井戸半裁状況（近世～近代）

県内遺跡詳細分布調査

沖縄県立埋蔵文化財センター
瀬戸哲也

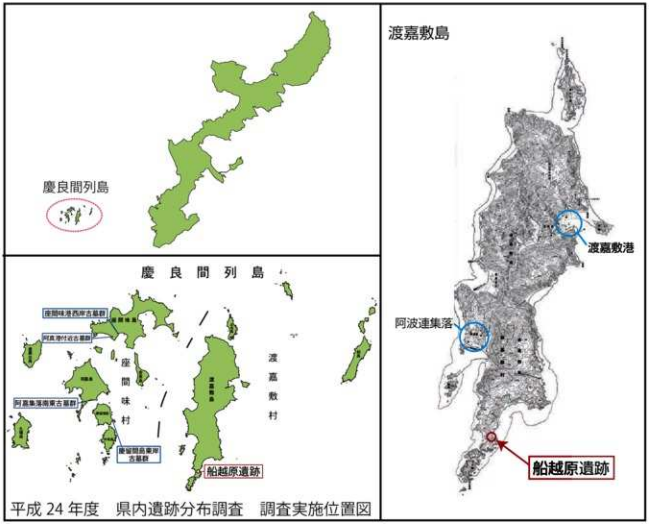
1　調査の目的

これまで埋蔵文化財の分布状況を把握が不十分であった慶良間諸島（渡嘉敷村・座間味村）において、平成 22 ～ 26 年度の予定で遺跡分布調査を実施しております。

平成 24 年度は、座間味村の古墓群を中心とした踏査と、渡嘉敷村船越原遺跡の範囲確認調査を実施しました。

2　座間味村の古墓群

座間味村の古墓群は、座間味島で 9 地点、阿嘉島で 3 地点、慶留間島で 3 地点、合計 15 地点を確認できました。墓は、コンクリート製のものや破風墓、亀甲墓などの様々な形態があります。その中でも、座間味港西岸のアカエー墓など、岩陰に多くの風葬人骨や厨子甕が見られる岩陰墓が特徴的です。



平成 24 年度　県内遺跡分布調査　調査実施位置図

3　船越原遺跡の範囲確認調査

船越原遺跡は、今から 38 年前に砂取り工事の際に発見された渡嘉敷島南端の海岸砂丘に位置する縄文時代前期～弥生並行期（約 6,000 ～ 2,000 年前）の遺跡です。数少ない爪形文土器（約 6,000 年前）があること、周辺で石斧などの材料となる石が大量に分布することから、考古学研究において注目されています。

調査の目的

砂丘の遺跡のため、大雨や風で崩壊が進んでおり、その保存が懸念されていました。そこで、当センターでは、平成 22・23 年度に船越原遺跡周辺の地形測量を行い、平成 24 年度より範囲確認調査を開始することになりました。

地層の状況

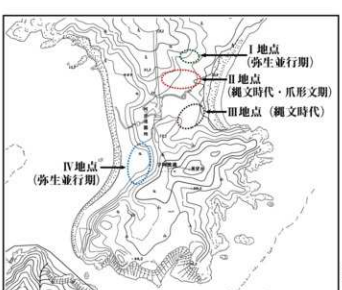
今回の調査では、爪形文土器が散在し、その包含層が露頭しているⅡ地点とした周辺において、露頭断面の確認、4 ヶ所のトレンチ調査を行いました。その結果、Ⅰ層（現砂丘層）、Ⅱ層（旧地表・砂丘層）、Ⅲ層（黄褐～浅黄色シルト砂層）、Ⅳ層（明赤褐色砂層）、Ⅴ層（灰白色砂岩）の層序を確認しました。

爪形文土器包含層の発見

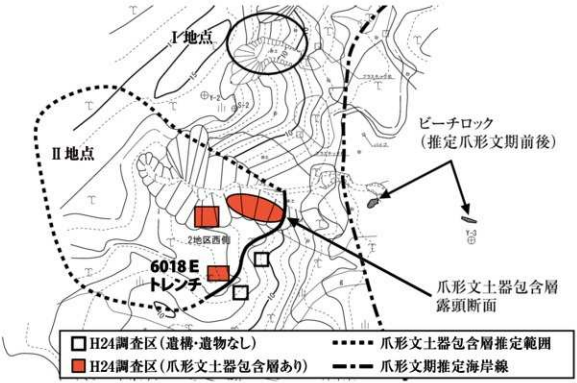
自然堆積と考えられるⅢB 層（浅黄色シルト砂層）に爪形文土器が比較的レベルが揃って包含されていることが明確になりました。4 ヶ所のトレンチ調査では、Ⅱ地点露頭断面の西側トレンチと、南側 10 mの 6018 E トレンチでⅢB 層が確認され、爪形文土器と、石英・砂岩等の大小の礫・破片が出土しました。

現在より高かった海岸線

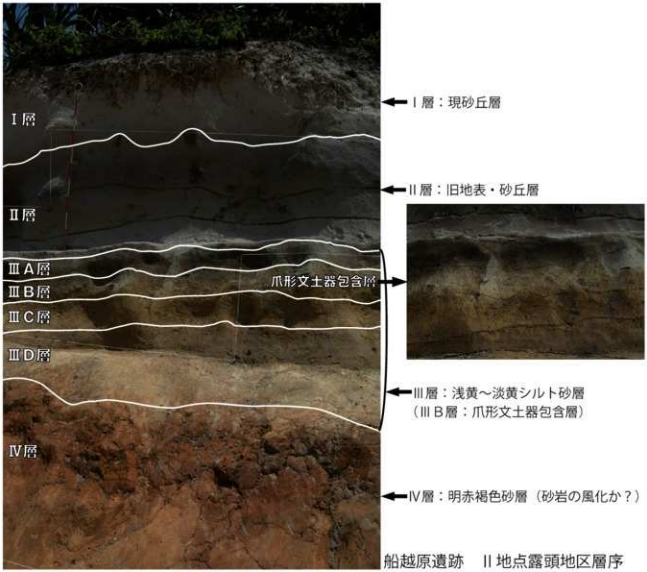
爪形文土器を包含するⅢB 層は、標高 9.5 ～ 10 mに位置し、現海岸線より 100 m以西に南北 30 m程度の範囲に広がることが分かりました。この範囲より海側へ約 10 m東の地点では、放射性炭素年代で約 4,000 ～ 5,000 年前と測定されたビーチロックが堆積していました。このことは、爪形文期前後の海岸線が現在よりも 6 mも高く、約 100 m内陸ま



遺物散布がみられる地点
（Ⅰ地点～Ⅳ地点）



平成 24 年度調査区位置図　遺物散布がみられる地点



船越原遺跡　Ⅱ地点露頭地区層序

で進入していたことが想定されます。

現在見つかっている土器

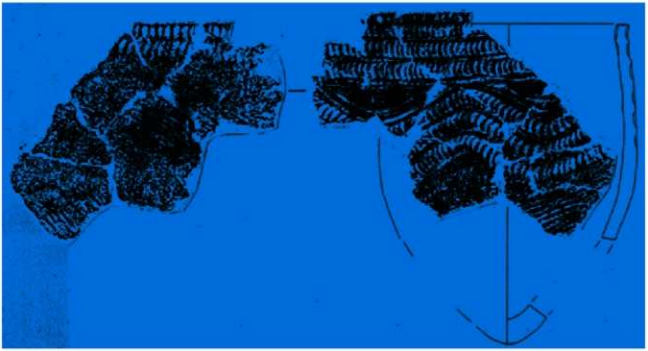
爪形文土器が最も多く見つかっていますが、他に九州で造られたと考えられる弥生土器（約 2,000 年前）や、同じころの地元の土器もあります。

注目される神野Ａ式土器　過去採集された土器には、神野Ａ式土器という沖永良部島神野貝塚で見つかったものと類似している土器があります。この土器は、縄文時代前期（約 5,000 ～ 6,000 年前）のものと考えられていますが、類例がほとんどなく、謎の土器となっております。次のような特徴をもっています。

土器の大きさとかたち　口径 14㎝、推定の高さ 19㎝と小ぶりのもので、砲弾のような底が尖った形が想定されます。

文様　口縁部に小さな竹を割った細い棒で爪形状の文様が水平に、胴部には弧状の線と波状に爪形状の文様が施されます。こういった文様は、神野Ａ式土器しか確認されておらず、他の土器とどういう関係にあるのかは、今後の検討が必要です。

今回の調査でも神野Ａ式土器は全く見つかっておらず、今後の調査でどの辺りにあったのかを追求できればと思います。



神野Ａ式土器（船越原遺跡 1975 年採集）復元図

戦争遺跡詳細確認調査

沖縄県立埋蔵文化財センター
瀬戸哲也

調査の経緯・目的

近代、主に沖縄戦において残された戦争遺跡について、文化財指定などの保存を検討するために測量等の記録調査を平成 22 年度から 5 か年計画で行っています。平成 24 年度は、これまでの調査で重要性が指摘された沖縄本島・座間味村・南大東村の戦争遺跡について、測量等の記録調査を行いました。ここでは、そのいくつかを紹介します。

留魂壕（那覇市首里）

首里城内の物見台である東のアザナの真下に師範学校生によって造られた壕です。1945（昭和 20）年 3 月 23 日から師範学校職員・生徒の生活の場として 5 月下旬の撤退まで居住され、壕の一部を沖縄新報社が借り受けて使用されていたようです。

当センターの首里城跡発掘調査において壕口を確認し、東西 40m、南北 20mの範囲に全長 100mの規模を測り、その平面形はコ字状とした人工壕で、坑木や工具痕などが見られます。なお、ウシジヌガマと言われる自然洞穴を挟み込むような形で造られています。

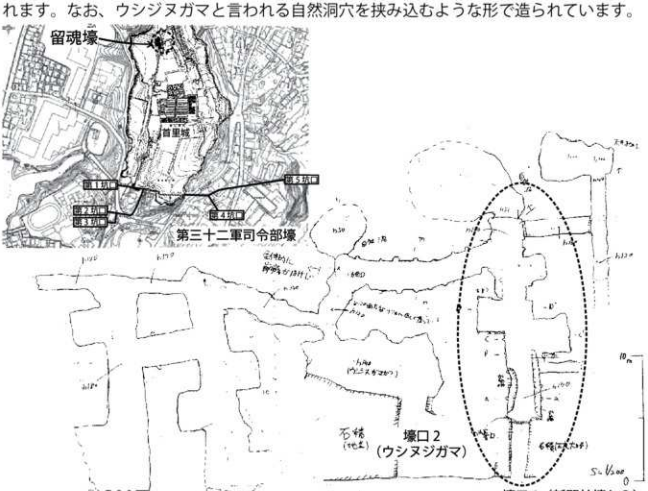


図 1　留魂壕（平面図）

海上挺進第１戦隊第２中隊特攻艇秘匿壕（座間味村）

慶良間諸島には、マルレというベニヤ製特攻艇を秘匿する壕が見つかっており、これもその一つです。長さ 13 m、高さ 3 mの人工壕で、海から 200 m離れた地点にあり、元々レールが敷かれており、海に出撃するようになっていたようです。

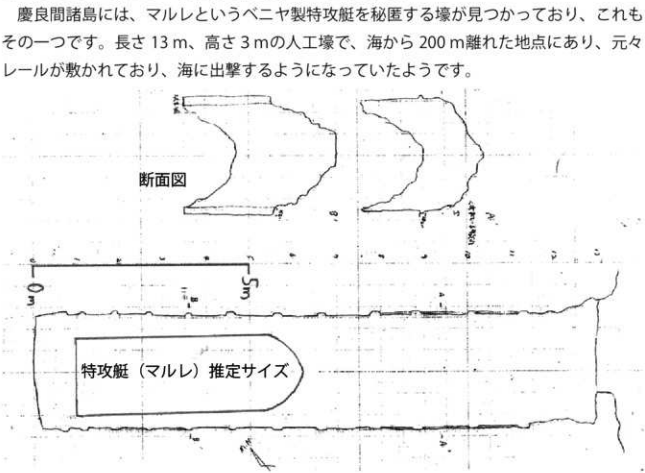


図２　座間味村　海上挺進第１戦隊第２中隊特攻艇秘匿壕（座間味島古座間味）

忠魂碑（座間味村）

座間味小学校裏手に位置し、よく残っている忠魂碑で知られています。今回、土台の裏を観察すると、「昭和十六年七月　土木建築請負業合資会社宮本　那覇市西本町五丁目一番」と刻名された石版を確認しました。建造業者が分かる碑文をもった貴重な資料です。

海軍監視所（南大東村）

南大東島の南端部に位置し、高さ２m、１辺 2.3 mの六角形を呈し、岩盤の上にコンクリート製の構築物です。監視窓のある部屋の壁の刻銘より、海軍沖縄根拠地大東島派遣隊が 1945（昭和 20）年５月１日に建立したものと考えられます。天井外面には「コノモノトルナ」という文字も見られ、このような刻銘はあまり例を見ないようです。

南城市前川・八重瀬町山川（新城後原）の防空壕群

雄樋川上流域の両岸斜面に多くの壕が掘られ、前川では 60 基、山川では 20 基の壕口を確認できます。証言等では、1944（昭和 19）年 10 月の十・十空襲後に２、３世帯共同で作った防空壕で、12 月頃には完成したようです。前川の壕群は、現在墓として利用されているものが多いです。各壕は、２、３程度の壕口を持ち、平面「コ」字形のものが基本となっております。小部屋や灯り取りなどが設けられ、坑木を有するものも少数あります。

このように、民間の防空壕が数多く集中して作られた地域はあまり知られていません。

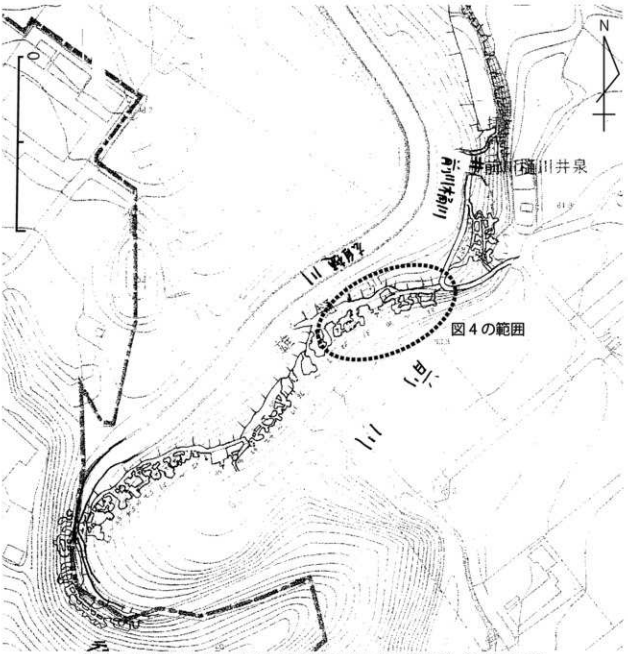


図３　南城市玉城前川及び八重瀬町山川（新城後原）の防空壕群

図４　前川の防空壕群（壕 26 ～ 32 拡大図）

平敷屋砲台跡（うるま市）

うるま市勝連平敷屋の丘陵に位置し、４基の砲台跡と関連すると思われる格納庫や壕・杭などが見られます。この平敷屋には、1941（昭和 16）年７月に発令された中城湾臨時要塞部隊が同年 10 月にその第三中隊が配備されました。同部隊は 1942（昭和 17）年に改廃され重砲兵第七連隊などに移行し、1945（昭和 20）年１月には独立歩兵第十二大隊第五中隊井上分隊が敵部隊の警戒を任務とする平敷屋分遣隊として派遣されました。

砲台跡は、胸壁径が６m前後で、砲座径が 1.5 ～ 1.7 m、その周囲に径約 3.7 mの範囲にコンクリートを貼り、放射状に５本の溝を有すること、周溝があることは４基とも共通しています。砲台２の周溝に貼られたコンクリートには、「十六年霜月」と刻まれており、要塞部隊が築造したと証明できる重要な資料です。

砲台は２基ずつセットのように通路で繋がれており、その間にはクンクリートの門柱を持った格納庫と考えられる穴が見られます。また、1944（昭和 19）年の航空写真でも４門しか見られておらず、名古屋高射砲陣地では当初４門配備が 1943（昭和 18 年）８月の編成改正により６門となるものが多いること、那覇港付近に存在した高射砲陣地は６門であることなどから、この平敷屋砲台は沖縄戦に備えて強化された様子はないと考えられます。

また、「陸」、「防二○」などと刻まれた石杭も見られ、長崎県対馬要塞、東京湾要塞などのものと類似しています。その用途については、明確な資料は見つけられていませんが、要塞用地の境界を示すものか、測量の基準杭などと考えられます。その他、コンクリートが床面に貼られたものや、半円形の石積遺構など、様々な遺構が見られます。

以上、本砲台跡は中城湾臨時要塞部隊によって築造されたものと考えられます。また、砲台にはその規模と５本の溝を脚台が置かれるスペースがあることから、八八式七糎野戦高射砲（対航空機用）が置かれていた可能性が高いものと思われます。

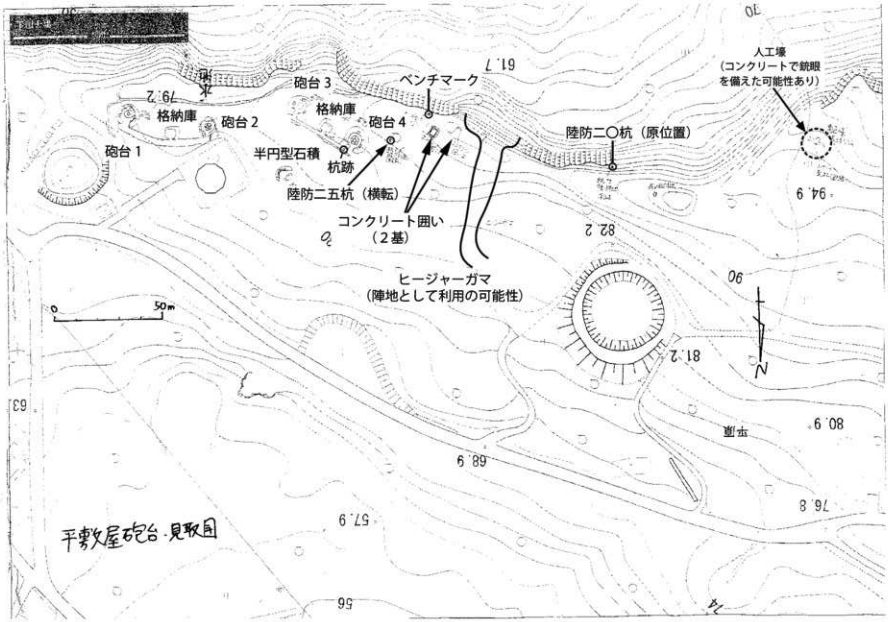
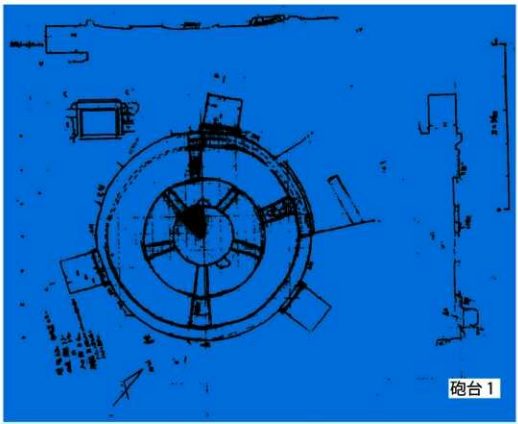


図5　うるま市平敷屋砲台跡全体略図



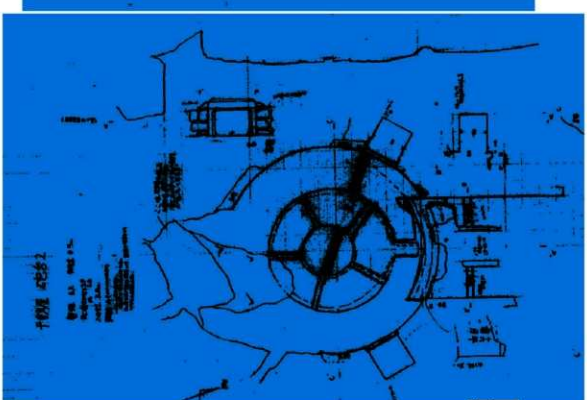


図6　うるま市平敷屋砲台跡遺構略図

白保竿根田原洞穴遺跡確認調査

沖縄県立埋蔵文化財センター
仲座久宜

所在地：石垣市字盛山～字白保
目　的：重要遺跡範囲確認調査
期　間：平成 25（2013）年 1 月 7 日～ 3 月 6 日
面　積：約 30㎡
時　代：後期更新世～グスク時代

1　はじめに

琉球列島の島々は、琉球石灰岩で覆われた地域が多く人骨が化石として残りやすいことから、旧石器時代の化石人骨が数多く出土することで知られている。これまで、沖縄本島や伊江島、久米島、宮古島などの島々において、1960 ～ 80 年代にかけて 10 か所前後の遺跡から発見されているが、八重山諸島では未確認の状態が長く続いていた。

このような中で、2010 年（平成 22 年度）に行われた白保竿根田原洞穴遺跡の発掘調査（以下「第 1 次調査」）で出土した人骨が、約 20,000 年前の後期更新世ものであることがわかり、その頃の石垣島に人類が到達していたことを明らかにした。

それから 2 年後、沖縄県立埋蔵文化財センターでは、遺跡のより詳細な性格・範囲を確認する目的で、3 か年計画による重要遺跡確認調査を行うこととし、昨年度は 2013（平成 25）年 1 月～ 3 月の 2 か月間にわたり発掘調査を実施した。調査にあたっては、形質人類学、DNA 分析、年代測定の関連分野の先生方に分析を依頼しつつ、分析に支障がないよう、遺物の検出や記録、取上げ、運搬、サンプリングに至るまで慎重かつ迅速・適切に行うよう努めた。次におもな成果概要を報告する。

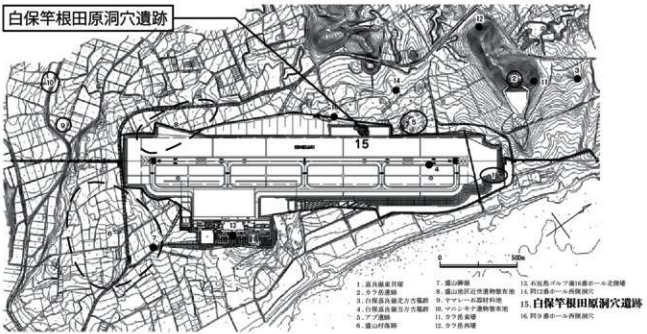
2　調査の概要

平成 24 年度の調査では、第 1 次調査で人骨を多産した H 5 グリッド III B 層周辺（16,000 年～ 18,000 年前 BP）の掘り下げを行い、ヒトの下顎骨や顔面、四肢骨等の骨が良好な状態で出土している。これらの人骨は、今後、接合作業を行うことで、当時のヒトの顔が復元される可能性を有している。

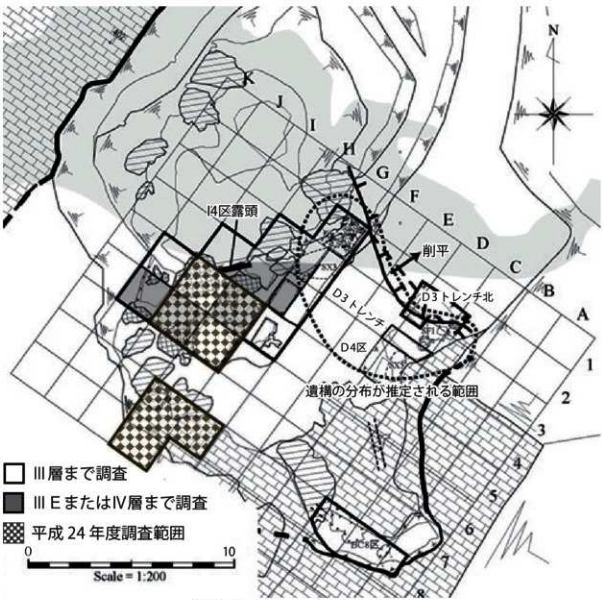
次に、調査区の南端（南壁）G 8 グリッド周辺において、地表面に人骨の一部が露出していたことから、遺跡の詳細な範囲を確認するため掘り下げを行った。その結果、人骨に下田原式土器や石器を伴う上層と、人骨のみが出土する下層が確認されている。年代については分析中で、今後の結果が期待される。

3　今後の計画

平成 25 年度まで確認調査を行い、平成 26 年度に調査報告書を刊行する予定にしている。また、これと並行して遺跡の適切な保存法や、地域での活用法について検討していく予定にしている。



第１図　石垣空港と周辺の遺跡



第２図　平成 24 年度調査範囲

層序	時代 (年代BP)	遺構	遺物（出土量：◎＝多い・○＝普通・△＝乏しい） 人工遺物				自然遺物												状況
							動物骨												
			陶磁器	土器	貝・骨製品	石器・石材	人骨	イノシシ	ネコ	ネズミ	コウモリ	カエル	リクガメ	トカゲ	ヘビ	トリ	魚類	カニ・ヤシガニ	貝類	
O層	現代	－																		ゴルフ場建設時の盛土。
Ⅰ層	中森期 (グスク時代・14～16世紀)	地床炉跡：1基	△	△			△	△		△	△	△		△	△	△	△		○	中森式土器、中国産青磁・白磁・褐釉陶器、タイ産褐釉陶器が含まれる。炉跡の発見により洞穴が生活に適した環境であった可能性を示した。
Ⅱ層	無土器期～中森期	津波堆積層か			△			△										△	○	最大80cm厚の砂質の層で、化石ホールのほぼ全面に堆積する。海産貝、枝サンゴ、軽石等含む。津波堆積層の可能性あり。
ⅢA1層	無土器期 (約2000年前・弥生並行)	炭化物集中：2基			△	○	△	◎	△	○	◎	◎	○	◎	◎	△	◎		◎	炭化物集中部には円礫や海産貝、イノシシ骨を含む。
ⅢA2層	下田原期 (約4000年前・縄文後期並行)	礫敷遺構		△																下田原式土器や下田原期特有の骨・貝製品が出土するが、石斧が出土していない。
S層	下田原期 (約4000年前・縄文後期並行)	崖葬墓		△	△	△	◎	△										△	◎	下田原式土器や下田原期特有の骨・貝製品が出土するが、石斧が出土していない。
ⅢB層	完新世前半 (8500BP～9500BP)	－				○	△	◎	△										◎	イノシシ骨が多数出土しており、中には解体痕が残る資料が含まれる。石器や石材がわずかに共伴して出土。
B層	後期更新世末 (12000BP)	－					△	○												出土するイノシシ骨には解体痕がみられない。
ⅢC層	後期更新世 (16000BP～18000BP)	－				△	◎	○	△	◎	○	○	△	○	○	△	△		△	人骨を多く含む層。解剖学的位置を保たないが、接合可能な頭蓋などがあり、保存状態は良好。
ⅢD層	後期更新世	－						△	△											ⅢC層とⅢE層の漸移層で遺物はほとんどみられない。
ⅢE～Ⅳ層	後期更新世 (20000BP～24000BP)	－					◎	△		◎	○	△		△	○	◎	△			複数個体の人骨やトリ、ネズミ等の小動物骨が多数出土している。
A層	更新世か	－						△		△	△	△		△	△		△	○	○	層位的にⅢE層・Ⅳ層の下位に位置づけられることから、更新世の層になる可能性がある。出土する貝は陸産貝。

白保竿根田原洞穴遺跡の基本層序と主な遺構・遺物

写真１　白保竿根田原洞穴遺跡調査状況

写真２　Ｈ６ 人骨出土状況

写真３　Ｈ６ 人骨検出作業

写真４　Ｇ９ 石製ドリル出土状況

写真５　Ｇ８ 人骨出土状況

今　後　の　催　し

企画展　入場無料

重要文化財公開

首里城京の内跡出土品展

平成 25 年 11 月 1 日（金）～ 26 年 3 月 23 日（日）

文化講座　予約不要・受講料無料

「白保竿根田原洞穴遺跡について」

第 57 回文化講座（石垣会場）	第 58 回文化講座
平成 25 年 12 月 1 日（日）	平成 26 年 1 月 25 日（土）
会場 石垣市民会館　中ホール	会場 沖縄県立埋蔵文化財センター　研修室

沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125　沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7（琉球大学附属病院横）

TEL 098-835-8752

FAX 098-835-8754

HP http://pref.okinawa.jp/edu

●開所時間　午前 9 時～午後 5 時まで（入所は午後 4 時 30 分まで）

●休 所 日　毎週月曜日、国民の休日（こどもの日、文化の日を除く）

年末年始（12 月 28 日～ 1 月 4 日）、慰霊の日（6 月 23 日）

※祝日と月曜日が重なった場合は、翌火曜日も休所